

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

和辻哲郎が、奈良阪で車夫から初めて聞いた「カラ風呂」は、「大仏殿が大きく見えてゐる坂の中腹に歩廊のやうな細長い建物」と『古寺巡礼』(初版)にあるから、忍性がハンセン病患者救済のために設けた北山十八間戸のことだ、その敷地の一郭にカラブロがあった。

和辻はその後法華寺でカラブロを実見し、内部を見て「云はゞ入れこに四方のやうに、浴室のなかに更に浴室がある」と驚いているが、床下から蒸気を湧出して充満する仕掛けの純然たる蒸し風呂だと正確に観察している。

## 蒸気を充满 風呂の起源



から80年ほど後の1996(平成8)年に、寺側から依頼を受けて、民俗文化財としてこの風呂を調べた。法華寺本堂の東側に、切妻造り棟瓦葺き、桁行二間梁間三間の妻入りの簡素な建物が建っていた。これが光明皇后の千人施浴発願で知られる「浴室」で、一般にはカラブロ(空風呂)と呼ばれていた。建物内部には、2筋四方ほどの風呂屋形があり、内部は二つに仕切られ、床は簀の子だった。当時はなくなっている東側の大釜で湯を沸か

小部屋に入つて衣を身につけていた。内部の天井を見ると、水滴の跡が至る所あり、実際に使われていたことがよく分かった。高さはちょうど人の背が立つ位で、1室に数人は入れる。小さな引き戸を閉めて外に出ると、そばの井戸から引いた水を溜める水槽があり、風呂屋形にしばらぐ籠つては外

いようにして、浴衣を身につけていた。建物は、1766(明和3)年に建て直されたものである。もとは四町四方の寺域の南東にあつたものを、寺が衰微して、田畠の中に浴室だけが建つたが、慶長年間(1596~1615)にこれを寺内に再建したといふ。浴室の床に敷かれた土は、平城京出土のものと似ており、カラブロの起源はさうにさかのぼる可能性がある。

風呂の変遷を知ることができるものとして、1997(平成9)年3月と2005(平成17)年には、国的重要有形民俗文化財に指定され、半解体修理と一部復元がなされた。その後2005(平成17)年には、国的重要有形民俗文化財に指定されている。

筆者提供

いようにして、浴衣を身につけていた。建物は、1766(明和3)年に建て直されたものである。もとは四町四方の寺域の南東にあつたものを、寺が衰微して、田畠の中に浴室だけが建つたが、慶長年間(1596~1615)にこれを寺内に再建したといふ。浴室の床に敷かれた土は、平城京出土のものと似しており、カラブロの起源はさうにさかのぼる可能性がある。

風呂の変遷を知ることができるものとして、1997(平成9)年3月と2005(平成17)年には、国的重要有形民俗文化財に指定され、半解体修理と一部復元がなされた。その後2005(平成17)年には、国的重要有形民俗文化財に指定されてい

たといふ。

その後大正には一度復活していた。法華寺を周囲の人々は「御殿さん」と呼び、昭和初年にはカラブロに入った人が「御殿さんのお風呂に入れてもらったら元気になる」と話していたという。